

## アルゼンチン

### 移住者を取り巻く状況

#### ○戦前

南米各国の中でアルゼンチンは97%が白人(1991年・平成3年)という白人系国家である。1816年、アルゼンチンがスペインから独立した時、新国家建設事業の最重要政策は、欧州移民を導入して国の発展の基礎を築くことであった。「政治とは植民である」ということを国是としたが、憲法には「移民は欧州人に限る」と明記された。

こうした背景もあって、有色人種の移住の門戸は閉ざされていた。しかし、明治期のアルゼンチン人の日本に対する感情や理解度は悪くはなかった。特に日露戦争の時、アルゼンチンが軍艦2隻(日進、春日)を日本に譲渡したこと、東洋の新興小国家日本が大国ロシアに勝ったことや、当国の新聞報道などに負うところも大きい。また、少数ではあったが、既に入国していた日本人の勤勉さや堅実性なども評価されていたのであろう。

こうした状況の中で、限られた合法的な入国手段や不法入国により、わずかながら日本人の移住が始まる。当時、査証を持って南米のどこかの国へ入国した者は、近隣のどの国へも移動入国することが出来た。笠戸丸で渡航した最初のブラジル移民780人のうち1年足らずで75%の者が脱耕しているが、そのうち160人がアルゼンチンに転住している。また、香川県人で初期のアルゼンチン移住者となった伏見秀次、八郎兄弟もこうした形でチリから当国に入国している。一方、船からの脱走や乗り遅れなどによる定住者は不法入国者として扱われている。

アルゼンチンへの移住はヨーロッパ人に限られていたため、当国にいる日本人は商社員や特殊技術者などは別として、ほとんどはブラジルの笠戸丸移民のように、安定した高収入の職を求めて他の南米諸国からアルゼンチンに転住してきた者であった。彼らは基本的に出稼ぎ移住で、高学歴や高い技術の保持者は少なく、語学力不足などもあり就労先は自ずから限られていた。

「日本人アルゼンチン移住史」(1971年・昭和46年刊)によると、第一次世界大戦勃発(1914年・大正3年)のころから、日本人の海外志向が高まり、徐々に移住者数も増えていった。1920年(大正9年)ごろの日本人移民数は約2,000人(うち女性は400人足らず)で、これら在留邦人はだいたい3つのグループに分けられたという。その1は商社、出張者などの紳士階級、その2は日本から渡来した知的階級の自由渡航者、その3はペルーやブラジルからの転住者とそれに呼び寄せられた人々である。第3のグループはさまざまな職業についたが、最も多いのは工場労働者の600余人(約31%)、これに次ぐ家事被用者が200余人、農業労働者は9%の190人程度で、その他運転手、職人、飲食品商などであった。

香川県からの最初の移住者は、山田恒次(高松市楠上町出身)であろう。渡亜年は不明だが、1918年(大正7年)の公使館登録者名簿にその名があり、それ以前に移住していたことは間違いない。1915年(大正4年)に開業していた日本人経営第1号の「カフェ・ハポネス」で働いて資金を作り独立、1919年(大正8年)に「カフェ・ミカド」を開店している。この時同郷の前川雪江を呼び寄せたようだ。したがって2番目の県人移住者は前川と言うことになろう。

なお、今雪のメモにはサン・フェルロニモ(San Felronimo)墓地に埋葬されている香川県人として、「山田庄助氏1922年・大正11年死亡、高松市楠上町出身、1919年・大正8年渡亜」と記載されているが、山田庄助は公使館登録者名簿に北海道出身者として記載されており、渡亜年にも食い違いがある。恐らく山田恒治との混同若しくは今雪の記録違いであろうか。「カフェ・ミカド」開店後の消息は不明だが、伏見兄弟が遺族のない県人山田

庄助(恒治の誤りか)のために墓地を買い取り永代墓地としたと言うから恒治を香川県人移住第1号としてよからう。

#### アルゼンチン公使館登録者名簿 (1918年の香川県人移住者抜粋)

Nombre	氏名	出身地	住所
Inagaki N.	稲垣 夏江		C.Pellegrini 173
Kasai S.	葛西 春峰		Rivadavia 231
Matsumura H.			Maipu 860
Yamada T.	山田 恒次		(Cordoba.F.C.C.)

また、公使館登録者名簿には稲垣夏江、葛西春峰、松村Hの3人が香川県人として記載されているが、葛西は高松の出身で、ブエノスの写真仲間では有名であったが帰国している。稲垣、松村もその後の消息は不明で、ア国で永眠した前川雪江を2番目の移住者とみなしてもよからう。

第3番第4番の移住者は、伏見秀次、八郎の兄弟である。彼らは1919年(大正8年)木村三郎の呼び寄せでチリに入国、2年間副大統領邸の家庭奉公をした後、アルゼンチンへ転住、コルドバの山田恒治のカフェで働いた。

1930年(昭和5年)から世界的経済恐慌の影響を強く受けたアルゼンチンは、失業者の増加により1932年(昭和7年)外国移民制限法を公布した。労働契約書があるか、充分責任のある殖民会社または産業団体が保証する者で一定所持金のある者しか入国出来なくなった。

そこで1935年(昭和10年)、外務省は農業および商業関係の実習生制度を設けた。現地で優秀な成績を上げている人に実習生を委託し、数年働いた上でその地に定着し、同胞社会の中堅として活躍させるというものであった。その地の領事が推薦する引き受け者に、中学校を卒業した青年を委託して指導手当を支給し、青年が独立する際は応援を頼むのである。この制度で1936年(昭和11年)、木田農業学校卒業生入谷弘が香川県から最初の農業実習生として移住、その後7人の木田農卒業生が続いた。

1941年(昭和16年)最後の実習生として香川県から田中千信(大川中学校卒)が移住した。この制度でアルゼンチンに移住した青年は合計116人で、この6年間に独立した者は18人、木田農卒の細川忠義もその1人である。これらの人々は戦後の実習生制度復活に際して引き受け者、指導者などとして大いに活躍した。同年5月、戦前移民最後の124人(うち20人が外務省実習生)がブエノスアイレスに到着、その後日本は第2次世界大戦に突入して移住は途切れた。

#### ○戦後移住

##### ・近親者移住と亜拓の設立

戦後最初に日本人が南米に移住したのはアルゼンチンであった。敗戦により日本人の海外移住の道は閉ざされていたが、1947年(昭和22年)アルゼンチン在住の日本人は近親を呼び寄せられるようになった。これは当時のペロン大統領の日本人に対する強い信頼と愛情によるものだといわれる。その背景に、明治以来の両国の親善と、在留邦人の信用が底流にあったことは言うまでもない。

この近親者移住は、呼び寄せ人が直接移民局に出頭し複雑な手続きを行わなければならない、しかもブエノスアイレス市から100km以内での呼び寄せは禁じられていた。

これらの問題を解決するため、1953年(昭和28年)亜国拓殖協同組合(亜拓)が設立された。拓殖事業を行おうとする人たちに土地を提供し、入植のための手続きや営農指導ならびに購買販売、信用事業を実施するものである。翌年日本人移住者の導入枠の獲得、1956年(昭和31年)にはガルアペーに実習試験場の設置、さらに日本海外移住振興株式会社のガルアペー移住地土地取得の仲介など活発な運動を展開し、戦後日本人移住者受け入れ団体として果たした役目は大きい。

#### ・公募呼び寄せの開始

亜拓の最初の仕事は、今までの近親呼び寄せに代わる一般公募による呼び寄せ移住であった。在留邦人の近親縁故者に限る呼び寄せだけでなく、広く日本全国から移住希望者を募集して、適格者を選定するという方法である。これはまた1954年(昭和29年)に設立された財団法人日本海外協会連合会(海協連)の初仕事であり、機関誌に「单身者も行けます アルゼンチン 家族者48、单身者25、募集開始」と初めてのアルゼンチン移住の公募をした。入植地はネウケン、リオネグロ、ミシオネス、メンドサおよびプレシデンテペロンの各州と、ブエノスアイレス州の在留邦人の所であった。呼び寄せ手続きの複雑さや関係機関が遠隔地にあることなどで、第1陣の2人がミシオネス州へ向けて出発したのは10ヶ月後の1955年(昭和30年)2月であった。

#### ・外務省実習生制度の復活

戦前の外務省実習生制度が非常に有意義であったことに注目した外務省は、1955年(昭和30年)制度の復活を図った。アルゼンチンでは、実習生の親睦団体アンディーノ倶楽部が後進育成の道を開き、在留邦人社会の中堅として活躍しており、1957年(昭和32年)から実習生の受け入れが始まった。この制度は5年間で終わったが、その間に移住した者は43人である。7年後の1970年(昭和45年)、再び同じような趣旨で海外移住事業団の青年商工業移住制度が発足した。

#### ・自営開拓移住地の創設

1957年(昭和32年)8月3日付邦字新聞らぶらた報知は、「歴史的な土地購入調印終了」との見出しで、当国有史以来初めての日本人集団入植のため、日本移住振興株式会社が購入するミシオネス州ガルアペ植民地の3,125町歩の売買契約が調印されたと報じた。この移住地は「ガルアペ移住地」と命名され、1959年(昭和34年)5月、第1陣4家族が入植。1965年(昭和40年)までドミニカからの転住者12世帯を含めて84世帯が入植した。香川県からも多田直広、大西末広の2家族が入植した。

日本人のアルゼンチン移住史上画期的なこの移住地創設には、かなりの紆余曲折があったが、ミシオネス州の戦前移住者約100世帯、戦後移住の約30家族がマテ茶、油桐、紅茶などの栽培にかなりの成功を収めていたこと、それを見ていた地主のガラシーノは、日本人の勤勉さと安定した生活ぶりから自己の土地売却を決めたこと、日本人の移住の道を開くために日本人先住者の多い、しかも地味豊かなミシオネス州を選び、日本政府や移住振興会社に働きかけた亜拓の努力などが実を結んだものと言えよう。

なお、移住者募集要領では、永住の目的で渡航することと明記されている。

入植初期はタバコ栽培などで活気のあった移住地も、基幹作物のマテ茶の栽培制限、油桐の価格低迷、それに代わる永年作物として導入した柑橘の病気、子弟の教育などの問題で好況のブエノスアイレス近郊の花卉栽培へと転住する者が増え、1991年(平成3年)には12家族になったが、植林、果樹、蔬菜、雑穀などの栽培で安定した生活をしている。

#### ・果樹栽培専業移住地の開設

花卉園芸に集中する日本人移住者の職種分野を広げることも考慮に入れて、日本人の多いメンドサ州に移住振興会社の第2自営開拓移住地が開設された。灌漑によるブドウ、桃などの果樹栽培が目的の移住地で、1962年(昭和37年)現地入植を皮切りに、1963年(昭和38年)北米カリフォルニアで派米短期農務者として就労経験をもつ青年10人が集団入植した。香川県からも金子知事の媒約による5組の集団結婚者が移住した。

入植当初の連続した災害や灌漑水の不足などで、1966年(昭和41年)までに入植した27家族も大半が退耕、定住者は11家族になった。

この他、ネウケン州にリンゴを中心とした果樹栽培の移住地として、エル・チャニャール移住地が設定され、4家族が現地入植したが、香川県人はいない。

#### ・小移住地の設定

戦後公募による青年の花卉栽培雇用移住者がかなりの数になったが、

これら青年の独立援護の一環として海外移住事業団(海協連と移住振興会社が合併した政府機関)が準備したのが、いわゆる小移住地である。この制度は1967年(昭和42年)に第一小移住地としてエスペランサ移住地が開設された。用地は事業団並びに独立希望者、亜拓の協力を得て選定し、予約分譲という新しい方式による移住地設定である。

1988年(昭和63年)に設置されたマグダレーナ移住地までエル・チャニヤール移住地を含め、14の小移住地が開設された。ほとんど花卉栽培を目的とした移住地であるため、一区画の面積は2~5ヘクタールと小さいが、果樹主体のバラデーロ移住地などは平均15ヘクタールある。ブエノスアイレス近郊に点在し、地味、市場、生活環境も比較的良く、移住者の独立安定に役だった。香川県からの青年移住者も多くこの小移住地に入植した。

#### ・亜国政府移住地への入植

1961年(昭和36年)フロンディシ大統領は通商航海条約及び移住協定等の締結のため外務大臣らを伴い来日、調印した。これに先立ち、大統領は前触れなしに日本人移住地を視察し、その勤勉、正直さを見た上で日本人の移住を奨ろうとした。移民局長らを一先発させて国営ウルキッサ植民地への入植を提案、北米加州での農業体験を経た青年に限って入植が許可され、1963年(昭和38年)28人が入植した。

こうした状況もあり、パラグアイ、ボリビアからの転住者も増え、日本人によるブエノスアイレス市近郊の花卉園芸業は大きな産業に成長した。

香川県人移住の草分けとして、前川雪江、伏見兄弟ほか数名について記述する。

#### 前川 雪江

(高松市楠上町出身、1895年・明治28年生まれ、1919年・大正8年渡亜。タケノ夫人も同町出身)

同郷の山田恒次が「カフェ・ミカド」を開店するために呼び寄せたものと思われる。同店で2年間働いたが結核になり、コスキンに転地して、療養を始める。その後へ伏見兄弟がチリから転住して来る。

病気が完治した前川は、1924年(大正13年)コスキンに転住してきた伏見兄弟と結核患者のためのペンションを共同経営した。当時、転地療養のためにコスキンに来る邦人が増えていたが、サンタ・マリア慈善病院の入院許可を待つ間の宿泊、医者との通訳、入院手続きなどの支援が必要だったのである。1927年(昭和2年)大西佐一郎と洗濯店を共同経営したが、コスキン駅の近くだったので、邦人結核患者を出迎えてベッドを与え、慈善病院への入院手続きなどを引き受けた。

1929年(昭和4年)、伏見兄弟がコルドバに移転した後、ますます増える同胞患者の面倒をみる者が無くなったことを遺憾とし、病気が治った前川、大西、山崎忠直、青木小一郎の4人が協力して寄付金を集め「コスキン救済団」を作って、1931年(昭和6年)患者たちのためのペンションを再開した。山崎の妻操の回想によれば、食料品店を経営していた山崎は庶務会計と一般食料の調達を、野菜は青木が、前川はシーマ博士(救済団の患者を無料診療した恩人)家族の洗濯物を、大西は結核を克服した自分の体験を講演し救済団への支援を呼びかけるなど、それぞれに仕事を分担して苦しい救済団の運営に当たったと言う。1936年(昭和11年)在亜日本人会の付属コスキン結核療養所として発足することになったが、前記4氏や伏見兄弟らは土地取得その他で大変な苦勞をした。施設が出来てからも前川らは「療養所委員会」の委員となり、戦後抗生物質の普及などで患者が激減して1960年(昭和35年)に閉鎖されるまで多くの日系人を助けた。その中には夫婦が子供連れで療養に来たが、2人が亡くなり子供が孤児となったのを引き取り、立派に育て上げたことまであった。こうした慈善活動の功績により、1968年(昭和43年)に勲六等瑞宝章を授与された。1978年(昭和53年)83歳で永眠した。

#### 伏見秀次・八郎

(高松市春日町出身、1922年・大正11年亜国に入国)

伏見家は農家で、小学校卒業後は農業の手伝いをしていた。当時、家を継ぐのは長兄と決まっており、次男以下は養子に行くか丁稚奉公をするほか無かった。大志を抱く青年にとって当時の海外雄飛の機運は無縁では

なかったろう。北米は排日運動が起こっており、日本人の移住先は南米ブラジルに重点が移っていた。一方、アルゼンチンは日露戦争の折、建造中の軍艦2隻を日本に譲ったことから親日的雰囲気があり、また正式移住第1号の榛葉が発信する現地情報などにより伏見兄弟もア国への関心が高かったと思われる。2人は1919年(大正8年)に木村三郎の呼び寄せでチリ国に入国、2年間副大統領邸で家庭奉公をした後アルゼンチンに転住した。前述の通り、当時最初に移住した国への旅券を見せただけで国境の通過が出来たので、正式手続きは不要だった。

兄弟は山田恒次の「カフェ・ミカド」で働いていたが、山田からカフェ店を売る話が出たので資金を工面していたのに、無断で他の日本人に売られてしまった。数ヶ月働いただけで、1922年(大正11年)コスキンへ移り、その国立サンタ・マリア結核療養所のコックとして就労した。ここに県人の前川雪江もいて、在留邦人の中にも同病を病んでいる人のあることに気づき、これらの人々にも療養の便宜を図ることの必要性を痛感、1924年(大正13年)意を決してコックを止め、邦人患者のためのペンションを開業した。このころ、邦人患者の多くは経済的にも精神的にも恵まれない人たちだった。日系社会も創生期であり、洗濯業、花卉蔬菜業、カフェ店の労働は厳しく、食事も貧しかったから、結核にかかる人が多かったのである。その上不治の病といわれて、患者は嫌われ、のけ者扱いを受けていた。さらに一世患者たちはスペイン語があまり分からず、中でも医学用語は全然知らない人たちだったのでコスキンに来て大変だったのである。

完治した前川も共同経営者となったし、コスキン救済団を組織した他の3人も、ここの下宿人であったという。

1925年(大正14年)弟義男が秀次の妻友枝と八郎の妻隆子と共に移住してきた。友枝は後年次のように語っている。「旅館を経営していると言うから、コックやボーイや支配人をおいたホテルだと空想していたところ、来てみたら肺病患者の木賃宿だった。全く泣くにも泣けなかった」と。その後若干の資金も出来たので、伏見3兄弟は東洋美術店「ラ・ハポネサ」を開くため1929年(昭和4年)コルドバへ移転し、ペンションは閉鎖した。美術品店は高価なため売れず失敗、雑貨店「バザール・フシミ」に転換し、商品の超安値販売を始め、一躍市民の人気を得て、以後順調な経営が続いた。1939年(昭和14年)、夫妻は子供を連れて日本へ帰り、兄に預けて日本の教育を受けさせた。戦後1948年(昭和23年)ア国に呼び戻している。戦後八郎の独立、秀次の隠退、さらにその後を引き継いだ義雄も老齢で隠退、最終的にはア国人に譲渡したが、長年続いた知名の店はそのままま今に残されている。

伏見兄弟は邦人結核患者の救済に尽くした。コスキン療養所の土地購入、建築などに物心両面から協力した。またコルドバ日本人会の発展にも尽力、いずれも会長、幹事長などを歴任し、日系人発展の基を築いた功績などで、秀次は1980年(昭和55年)勲六等旭日章を受賞している。1984年(昭和59年)90歳で逝去。

伏見八郎は戦後食料品店を開店独立するまで兄秀次と行動を共にし、特にバザー経営で商才を発揮した。再三コルドバ日本人会長も務め、特に会館の購入の時には多額の資金を融通、事業を全うさせた。1970年(昭和45年)脳卒中で急逝。71歳。隆子夫人は常に公私ともに多忙な夫を助け、食料品店を守り日夜働いて内助の功が大きかった。1996年(平成8年)没。

伏見義雄 兄秀次・八郎の呼び寄せで1925年(大正14年)ア国に移住した。両兄と共に東洋美術品店、バザール経営に参加し、コスキン救済団への協力、またコルドバ州日本人会長なども務め、特に会館建設時の会長としてそれを実現させたことなどの功績で、秀次と共に勲六等旭日章を授与された。1996年(平成8年)逝去。妻茂子は八郎の妻隆子の妹。息子二人は計理士と大学教授。1980年(昭和55年)没。

## 上田 秀之助

(直島町出身、1926年・昭和元年移住)

直島村村長の子として生まれ、青年期には新国劇にあこがれて東京に出たが生来の不自由な発音が治らず断念、移住推進団体の日本力行会に入ってアルゼンチンに移住した。家庭奉公をはじめに全国を巡り歩き、いろいろな仕事をした。釣り用のボートを作って有名になったこともある。各地を放浪中に結核になり、伏見兄弟のペンションで療養に努めた。全快後

はカルロス・パスで船大工をしていたが、前川らが人物を見込んでコスキン療養所長に推薦した。就任以来所内の空気は一変し、清潔になり、すべての施設が立派に整い、患者から慈父のごとく慕われたという。発音に重い障害があったが、知人、友人と話す時はほとんど正常で、ア国人との会話では文学の素養があるから上品なジョークがうまく、インテリ階級の人たちに評判が良かった。後に養鶏業に転じたが、還暦を過ぎたころコルドバ市外に移転し隠退。1970年(昭和45年)に68歳で没した。

なお、県人ではないが療養所のアルマンド・シーマ博士について付言しておきたい。コルドバ国立大学医学部卒業後、骨折した手首が湿気の多い日には痛むので、乾燥したコスキンに来て、伏見兄弟、前川が経営するペンションに滞在したことがあった。そこで秀次らの侠気と親切さに感動して結核専門医となり、終生コスキン救済団の患者の診療と治療を無報酬で引き受けたのである。日本政府は勲三等瑞宝章を贈り、また博士の診療で助かった日系人は千人にも達したと言われ、それらの人や有志が、1970年(昭和45年)の大阪万博への往復切符と滞在費を寄贈してその恩に報いた。1979年(昭和54年)永眠。

その他、上条定吉のことも記録に残したい。今雪の「虻鳴録」によれば、彼は1921年(大正10年)に船員としてアルゼンチンに来たが、船に乗り遅れて日本に帰れなくなり、そのまま定住した。ブエノスアイレス市内に住み、独身で庭師をしていた。結果的に密航者となったせいも、県人、日本人いずれとも交流が無く、友達は長島孝太郎(ア国人に「神の手」と言われたほどの整骨師だったが帰国したようだ)くらいだった。上条を知る数少ない人に二宮浩一(高松市田村町出身。木田農を卒業し、外務省農業実習生として松本近義と一緒に1937年・昭和12年着ア)がいる。二宮は長島と同郷で隣人だった関係で上条とも顔見知りだったが、県人の間では上条のことは話題に上らなかった。日陰者のような生活を余儀なくされた者の悲劇であろうか。